

結腸を考え、治療は横行結腸を主体として考えるようである。小腸、大腸の実体は観察しておりながら、経絡の立場から把握し、脾は五臓の一つとして観念的に消化吸収の主体と考えていたようである。

(京都府京都市)

## 国宝宋版『史記』扁鵲倉公列伝における幻雲注の引用医書について

関信之、小曾戸洋、真柳誠

国宝指定の『史記』南宋慶元黄善夫之敬室刊本(南化本)一百三十卷(国立歴史民族博物館所蔵)は、集解・索隱・正義の三注合本としてはもっとも古く、中国本土には佚して伝わらない。本書は『史記』の底本としても逸品であるが、そこに記された多量の書き入れもまた史記研究資料として第一級の価値がある。水沢利忠『史記会注考証校補』によれば、本書は鎌倉期には日本に将来されており、その後、公家社会の学問に代ってあらたに学問の主流になりつつあった五山の学僧の手に帰している。本書には数名の筆になる書き入れがあるが、そのほとんどは、幻雲(月舟寿桂、一四六〇〜一五三三)によるものである。幻雲の書き入れは、ことに扁鵲倉公列伝第四十五においては精密を極めており、各葉の間に数葉を綴入するほど細かく行われて

いる。

その引用医書の書目については、すでに『史記会注考証校補』にも報告されているが、若干の訂正を含めて左に示す。

『新刊補註釈文黄帝内经素問』啓女子次註林億孫奇高保衡等奉勅校正孫兆重改誤、十二卷

『靈枢』史崧校正

『黄帝八十一難經』盧国秦越人撰呉太医令吕広注前歙州歙県尉楊文撰演

『集註難經』五卷、金紀天錫著

『葉註難經』金張元素著

『勿聽子俗解八十一難經』六卷、明熊宗立撰

『素問入式運氣論奥』三卷、宋劉温舒著

『脈經』晋太医令王叔和撰、明成化重彫元泰定刊本

『新刊通真子補註脈要秘括』晋王叔和撰宋劉元賓註

『增修註王叔和脈訣機要』晋王叔和撰宋劉元賓註

『脈訣集解』十二卷、宋李嗣著

『察病指南』三卷、宋施発著

『王叔和脈訣図要俗解』六卷、明熊宗立著

『針灸資生經』七卷、宋王執中著

『存真環中図』一卷、宋楊介著（欧希範五藏図も引く）

『太平聖恵方』一百卷、宋太宗勅撰

『聖濟総録』二百卷、宋徽宗勅撰

『太平惠民和剂局方』十卷、宋徽宗勅撰

『三因極一病証方論』十八卷、宋陳言著

『濟生方』十卷、宋嚴用和著

『癰疽弁疑論』二卷、宋李世英著

『類証増註傷寒百問歌』四卷、宋銭聞礼著（傷寒解感論を

引く）

『泰定養生主論』十六卷、元王珪著

『東垣先生此事難知集』二卷、元王好古著

『医経溯洄集』一卷、元王履著

『格致余論』一卷、元朱震亨著

『崔嘉彦脈訣』一卷、宋崔嘉彦著

『明医雑著』一卷、明王綸著

『医書大全』二十四卷、明熊宗立撰（医学源流を引く）

『奇効良方』六十九卷、明方賢撰

『証類本草』三十卷、宋唐慎微撰（薬性論も引く）

『湯液本草』二卷、元王好古著

『延寿類要』一卷、竹田昭慶著

引用医書は三三種（漢籍三二種・国書一種）に及び、当時の禅林では最高の学僧であった桃源瑞仙（一四三〇～一四八九）の学を継承した幻雲の広範な知識の一端がうかがえる。

また『存真環中図』『集註難経』『脈訣集解』『薬註難経』の四書はすでに佚して伝わらず、幻雲の標記によってのみ旧姿を留めている。

引用医書のうち、引用回数が多い『素問』『靈枢』『難経』『脈経』について幻雲は、自分の見たテキストの序文を克明に書き写している。とくに『難経』の引用は、多紀元胤が『医籍考』で「幻雲標記は楊玄操の原本に似る」と述べているように、従来からその成立課程に議論のたえない『集註』の研究上重要な資料である。なぜなら現行の祖本は江戸の慶安五年（一六五二）の刊本であり、そこには楊玄操の序文が載せられているものの、時代的には一挙に一五〇年も溯ることができからである。

幻雲はわが国最初の刊行医書とされる阿佐井野版『医書

大全』（一五二八年刊）に跋を書いた人でもあり、越前一乗谷で『勿聴子俗解八十一難経』を出版した谷野一栢や、堺の名医竹田定祐らと親交をもち、医薬知識に精通していた。

この幻雲標記からは、すでに亡佚した著作だけではなく、室町時代後期における漢籍医書の受容や、当時の教育の状況も知ることができる。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史文献研究室）